

タイ北部における森林を利用した土地利用

8月5日 事前講義

講師：佐々木綾子（京都大学 ASAFAS）

本講義は、北タイの高地に居住する少数民族による焼畑の実態、焼畑および伐採による森林面積の著しい減少、および政府および王室によるケシ代替作物の奨励の内容、という3点を、文理融合的な視点から明らかにした。

北タイは、平地から山頂にかけて混交落葉林、マツ林、乾燥常緑林、山地常緑林という植生をもつ。山地常緑林は国立公園として保護されてきた。稲作を行っている低地タイ人が定住する平地とは異なり、高地ではモン族などの少数民族が伝統的に焼畑やケシ栽培を生業として居住してきた。少数民族の焼畑は火入れ・作付・休憩というサイクルをもつ。

しかし、こうしたサイクルをもつ焼畑に加え、森林伐採も森林面積の減少の要因として指摘される。実際、80年代後半には60年代の森林面積の50.8%を消失した。

そこで、政府は伐採・焼畑およびケシ栽培からケシ代替作物の常畑作や水田への転換を奨励した。具体的には焼畑やケシ栽培からキャベツなどの高地での換金作物の栽培、または水田への転換である。特に、ケシ栽培は1950年代から転換を推進してきている。王室も、地域経済の活性化のために、①農業支援、②低所得者に対する支援、③少数民族を生産者とする地域特産物の空港内専門店での販売、といったプロジェクトを実施し焼畑からの転換を支援してきたのである。

また、本講義では換金作物を目的に、同地に外部からの人口流入が増加してきている状況も指摘された。

（文責：小西鉄）